



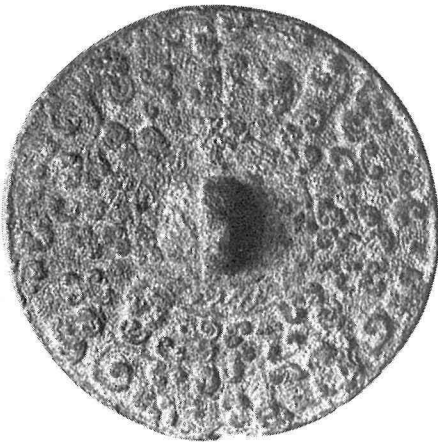
(1) 殷墓出土鏡



(2) 双鈕虎紋鏡



(4) 虺龍紋凹面鏡



(5) 蟠螭紋凹面鏡



(3) 人物禽紋鏡

中国殷周の古鏡

梅原末治

【要約】 中国に於ける金属鏡の由来については、一九二〇年代に、戦国時代の豊富な遺品の出現によつて従来知られていた漢鏡にさかのぼる以前の鏡式がはじめて確かめられたのであつた。しかしそれに先立つ殷周代のものについては、ほとんど確実な例に接することがなかつた。ところが前年の、安陽殷墓での発掘品について、新たに河南省陝県出土の東周虢国の鏡などの出土の報告がされたことから鏡の起源の問題が現実考へられることになつた。本稿はそれらを紹介するとともに、手許にある若干の關係資料を加えて、それ等の性質から中国鏡の起源を推し、さらに後の時代のものとの関連を考察したものである。

古く中国で非常に発達した鈕のある金属鏡に就いては、今世紀の二十年代に入つて戦国時代の豊富な遺品が新たに出現したこと、この時代の様相が、はじめて明らかになり、従来知られた漢鏡との連関が確かめられるようになった。併しそれ以前に遡る鏡となると、戦国時代鏡の実例は夥しいにもかかわらず、其の後一九三五年に河南省安陽侯家莊古墓群の発掘調査の際、その一基から鏡と認められる

遺品の発見が伝えられたのみで、他に聞くところがなく、三十年に近い歳月が過ぎた。ところが一昨年一九五七年度に行われた黄河水庫工作隊の河南省陝県上村嶺地区における東周虢国古墓群の整理発掘に当つて、四面の古鏡の出土が伝えられ、ここに確実な資料を加えることになつた。

故梁思永氏の好意に依つて、出土の翌春、先の安陽出土品を見ることが出来た私は、一例ながら同氏と共にそれが鏡と認むべきものであることを知つて、中国の鏡の起源に就いて新しい関心を惹いたのであつた。去る一九五六年の

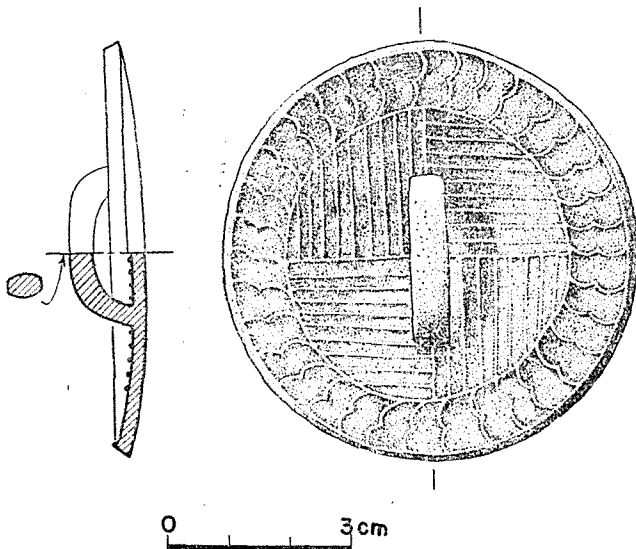
秋、台北に出掛けて再び殷墓出土の遺物類を観察する機会にめぐまれた際にも、高去尋氏と、再びこの遺品について検討を重ねた。従つてこのたびの陝県に於ける東周初期とされる鏡の新出土に対して深い興味を覚えたことは言うまでもない。

ところで殆んど時を同じくして、殷墓の遺品に就いても高去尋氏の「殷代的―面銅鏡及其相關之問題」(『中央研究院集刊』第二十九本所掲)が公にされたのである。そこで此の機会にこの二つの確実な遺例の外に、手に入れることので出来た関係の資料を加えて、なお問題としてこのされた戦国時代以前の古鏡、即ち殷周代の鏡に関して考究を加え、進んでそれ等より考えられる中国鏡の起源論にまで及ぶことにした。

二

さて戦国以前に遡る古鏡と認められるものうちで、最も古い安陽の出土品に就いては、すでに「河南省彰德府外侯家莊古墓群の概観」(『宝雲』第三一)にその図を載せてこれを紹介したが、このたび高氏の詳しい記述が出てその実

体が明らかになつた。それは面径六・七センチの可なり反りの目立つた小さな円板の背面に、コ字形に近い大きな鈕を作り、それを繞つて裝飾紋を施したものである(図版1及第一図)。いま更にその細部に就いて見ると、平滑な面は



第一図 殷墓出土鏡形状図(抱高氏原図)

ほぼ正しい凸面を示していて、そのそりの曲率は径に対して約三・五ミリである。次に背面では、特に目立つた縁を作ることなく、厚さ三ミリ内外の体は面の曲率に応じた内反りを呈して、それに鈕を中にした裝飾紋が施されている。中央の鈕はやや角丸カド丸に近い帯状の長さ三センチ、幅六ミリ、高さ一センチと云う大きいもので、それに対する背紋は、外縁に沿つて突線で内外の二圏を劃し、それぞれが同じ突線紋を以て飾られている。帯状の外の方の紋様は、二つの弧線を中央でつないだものの繰返し——総数は三十四——であり、内区の方は中央の鈕の方向と、それに直角に交る線とで正しく四分し、それぞれに互い違いに平行の条線をいれた、簡単な整つた構図である。右の二つのうち内区の図紋は単純な幾何学紋であるが、外帯紋は、殷代に多く見られる所謂虺龍文の長い体軀を飾るのと同じ特徴を具えたものであつて、その表出はすべて鮮明である。鏡体は古墓出土品によく見受けるように、現在は殆んど緑銹で覆われているが、高氏に依ると、その銹の上に面では三ヶ所に水銀朱の付着があり、また一ヶ所に織物の痕跡が認められると言う。併し、その縁辺の銹の間に一部分本来

の地肌をとどめた部分があつて、ここに見られる平滑な面は、白銅の色沢を呈することが注意されるのである。

以上の記述から、鏡としての通性を具えたことが認められる此の遺品の出土地は、安陽侯家莊西北崗殷墓の一つ、即ち調査者側のHPKM一〇〇五号墓であつて、それは同地東区に於ける小墓群中の西北角近くに位置している。一体右の東区の小墓群と云うのは、同じ西区にある所謂殷大陵に付随したと認められるもので、発掘調査者である故梁思永氏の検討の結果からすると、無慮千百基を超える同地区の小墓は、凡そ九つの組に分けられ、是等の組は相互の間に先後の關係が存して、西区にある大墓群のそれぞれに伴つた殉葬墓と解される。ところで本遺品が見出された一〇〇五号小墓はこのうちの第七組に属して、ほぼ同様な他の三十六基に、四基の馬壙と一つの車壙とを加えて八列をなして居り、この組は當道の先後の上で、殷の後半ではあるが、あまり遅くない時期に属すると言うのである。墓自体はほぼ南北の方向をとつた壙の長さ約二・三メートル、幅一メートルを越えない浅い堅穴式で、その中に頭を北にしてぎつしりと六躰の遺骸——大体仰臥屈肢葬のそれ等はよく本

来のままに存した——が埋められていた。そして遺品はこのうち西壁に近い一体の遺骨の下に面を上にして副葬されてあつた。なおこの墓では他に目立つた中柱旋龍飾の盃形銅器をはじめ、別に銅盃、銅壺、勺、銅鑊等の銅器類のほか、陶器・骨製品なども存し、その中柱旋龍飾の盃は殊に殷銅器としての特色の豊かなものであることが注意されるのである（陳夢家「殷代銅器」『考古學報』第七冊図版第八・九）。

以上挙げた遺品に関する考古学上の諸所見からすると、それが殷代のものであることは充分に認められる次第である。ところで遺品そのものの示すところが、面の外反りこそやや目立つてはいるが、鈕を持った円板の作りや、それが良質の白銅であることなど、映像の具としての鏡の通性を具えており、更に鈕を繞るその裝飾紋にあつても、戦国以降のものとは違う幾何学的紋様ではあるが、既に丸い鏡背にふさわしい構図を示して、一部に時代の様相の表われた帯紋も見られ、既に金属鏡としての一の型を示すもののあることが認められるのである。ただ当時にあつては、その前後に夥しい殷墓群が掘開されて、驚く可き多種多様な文物が出土したにもかかわらず、多くの人が鏡と認めるこ

のような遺品は、他に全く見当らず、而もそれが従来の中
國古鏡觀に対して、あまりに時代のかけ離れた孤例である
ところに、解釈上の問題をのこすことになつたのであつた。
高氏の「殷代の一面銅鏡及其相關之問題」は、その記述が
示すように、如上の点に就いて、豊富な当代の文物に關す
る造詣から、形態その他あらゆる面に互る周密な考察を加
え、それに解答を与え得ることを期されたものである。こ
のような鈕のある形を持つ器体が、その時代に作り出され
たことに関する氏の所論に対して、それを裏付けるものと
して、今日ようやく明らかになつた殷代に於ける一般文化
の進歩、殊に尊彝其他に見る鑄造技術の大きに發達してい
た事實が改めて指摘される可きであろう。

一九三〇年代の安陽に於ける殷代の諸跡、殊に殷墓群の
學術發掘に依つて、中国では西紀前二千年代の後半に鑄銅
の技術が大いに進んでいて、古代世界に於ける、言うなら
ば一つの頂点を画したことが確められた。即ち出土の銅利
器に於いて実用の域を超えたものが多い上に、尊彝即ち銅
容器類に特色の著しいものがあり、利器の或者が硬度の高
い、銅と錫の合金たる白銅を以つて鑄造されているのみな

らず、同じ質料の複雑な形の容器類も少なからず存在することがそれを如実に示すのである。それ故、この様な技術を考えれば、同じ白銅を材料とした鏡が、その間から作り出される可能性も考えられ得る筈である。こうしてここにあげた問題の鏡が現実に作られたのであろうが、ただ当時にあつてはなお一般化するには至らなかつた。これが、他に類品の乏しい所以かと想像されることなのである。

三

殷代と認められる上記の鏡に対して、新しく知られた河南陝県上村嶺古墓群出土の東周の遺品は、それを録した「一九五七年河南陝県発掘簡報」〔考古通訊〕一九五八年第十一期）に拠ると、四面であつて、いずれも径六・五センチ前後の小形で、その三面は素紋であると言う。ただそのうち一二二二号墓から出た一面のみに禽獸紋が鋳出されていて、図像が珍しいところから拓影が載せられており、なお別に『文物参考資料』の一九五八年第十一期にも写真掲載しているの、幸に両者から鏡の實際を窺うことが出来るのである。即ち径六・七センチの此の鏡は、縁や帶圍

のない鏡背の中央に、細手ではあるが、並行した二条の鈕が作られていて、それを繞つて四方に線表出の図像を鋳出したものであり、これは転載した拓影（第二図）に見られる通りである。図像は鈕条の左右に相向つた虎と思われる獸を大きく表わして、開いた口の、牙の目立つたその側面影が主紋をなして居り、これに対して鈕条の上辺に馬と見える動物の同じ側面形（第四図の中央）、また下方に兩翼をひろげた禽形を配し、それ等が一方より見るように構図されている。是等の禽獸の図像はいずれも稚拙なもので、殷周の古銅器に於けると同じ動物文ではあるが可なり違つて、原始絵画に近い趣がある。この点は鏡体と相俟つて、欧亞大陸北部地帯での青銅器時代の銅鏡に、時に見受ける背面に図紋を飾つたもの、例えばシベリア出土で、いまエルミタージ博物館に蔵する馴鹿紋鏡（第三図）に似通つたところがある。実体はなお明らかではないが、同時出土に係る他の三面が素紋であることと云う事実も、北方地帯のそれ等が主として素紋であることと、此の場合併せて顧みられる。併し馴鹿紋鏡にあつては、いずれも四足に描き出されているのに対して、この虎や馬の形は、殷代古銅器紋に見るのと



第二図 陝東出土禽獸紋鏡拓影

同じ、純然たる側面的な表現であるのをはしめ、その鈕が細手ながらコの字形と見られることや、殊に縁に突起などを作らない点などで、前記の股代の一例に相通じたことが認められる。従つて作りは粗で、質も青銅のように察知されはするが、古いさきの股代の鏡を承けた例とすべきであらう。

此の鏡の出土した遺跡は一九五六年から調査がはじまつた河南陝東上村嶺区の古墓群であつて、同年秋の調査に係

る四基の墓中の、大規模な墓から、銅製品を主とする二百余件の副葬品が出土した上、その一つの銅戈に「虢太子元徒戈」なる銘文があるところから、東周初期のものとして注意を惹いた。それが一九五七年度に於いて、新たに調査を経た同期の墓が二百三十八基の多数に上つて、それ等がいずれも地下深く壙を穿つた竪穴式であることも股墓と異なるところがなく、このうち副葬品の多い大形や、中形の墓から、他の古銅器と並んで鏡が存したのであつた。そし



第三図 シベリア出土馴鹿紋鏡

て右の数多い銅器中の尊彝類の八器に銘が存し、一六三一
号墓墳の高には、「鏡季子段作子_レ孫_レ永寶用享」、一八
一九号墓の鼎に「尹小叔_レ鼎」、また一六〇一号墓の銅盤
には三行に「盧金子孫、作宝般子_レ孫_レ永寶用」とあつて、
それぞれの器形が周代中期の通性を示しているのと相応ず
るものがある。更に郭沫若氏の記述（『文物』一九五九年第一期）
に依ると、特に取り上げた禽獸紋鏡の出たその第一二二二
号墓でも、四脚の銅鼎が共存していて、それは無銘ではあ
るが、上帯の華紋は前記鏡季氏段高と殆んど異なるところ
がないと言ふ。従つて鏡の年代の東周初期に遡ることはい
よいよ確められるのである。

四

以上はこのたび世に出た陝隕の鏡の概要であるが、その
示す鏡式からすると、同種の遺品として既に二十余年前に
公にされているものがあり、なお他にも類似したものが存
することが新たに顧みられて来る。即ち前者は故サルモニ
ー博士 (Alfred Salmony) が “*Neue Typen chinesischer
Spiegel und ihre Datierung*” (Sinica VII Jahrgang Heft 2,

1932) の第八図に載せた一鏡である。当時博士はそれを漢鏡
と考え、図様の上から南方支那における鑄造と想定したの
であつた。ところで巴里のガットマン氏 (Edgar Gutmann)
が南支那から將來したと言ふ、ムーア蒐集品 (Moore Collec-
tion, New York) 中の此の鏡も、径七・一センチの小形で
あるが、図版3の写真に見るように、太くて大きな鈕を繞
る背紋はやはり線表出の古拙な図柄で、上辺に右手をあげ
た人物が立つており、その向つて右辺から左の方へ五つ
の禽形を順次に布置し、一隅に小禽を添えたものである。
そしてそれぞれの禽形は体軀が角張つた一本足の側面形を
表わして、うちにS字形を容れた古拙な図像なのである。
その個々の図形は固より違ふが、表示の工合に至つては上
述上村嶺出土の一鏡と全然同様である。従つて、鈕は太い
一条のものながら、両者が同じ鏡式であることは何人も疑
わないであらう。

次にこの一鏡とはやや違ふが、よく似た遺例と認められ
るものに、故守屋孝藏氏蒐集品中の一鏡がある。図版2に
載せた同鏡は、径八・一センチのやはり小さな、面に極
めて少し許りの反りのあるもので、昭和の初年に中国から

将来されたと言ひ、その青銅の地肌は鮮かな緑錆で被われて、発見地こそ明らかでないが、新しい出土品であることを示している。この鏡は背面の周囲にやや高い突起縁を作つてゐる点で（第六図の1）、既述の馴鹿文鏡に似たところがあり、これまで、同じ北方系の遺品と考えられて来た。併し今にして考えると、中央にあるその鈕は二条の相並ぶ細手のコ字形をしてゐるところが、陝西の一鏡と全く同じである上に、これを繞つて大きく表わした廻文の虎と



第四図 東周鏡背の禽獸紋

ことが認められる。従つて、これも当然同時代の一例とすべきであろう。かくて是等の若干例の示す東周初期と認められる鏡は、いずれも小形ながら禽獸紋で背面を飾つて、それが鈕を中心にして一つの共通した構図を示しており、それぞれの禽獸紋は第四図に載せたように稚拙なところはあつたが、古く行われた古銅器——尊彝紋に於けると同様な側面像のものなのである。

覚しい怪獣も、同じく口を大きく開き、牙をいからせた、側面形であつて、その古拙な表現の工合も全く同様である

そうすると鑄成の点では、もとよりそれ等とはかなりかけ離れ、また時代も後のものであり、背紋は整い、鏡体も大きく、鈕の形も異なつてはいるが、我が上野国から出土したと伝える狩獵紋鏡（東京国立博物館蔵）が、この一群と似通つたところのあることに気が付かれる。さらに、所謂多鈕細紋鏡の双鈕形のもとづくところも、同時に顧みられて来るのである。この狩獵紋鏡は彫しい本邦古墳の出土鏡の間にあつて、特殊なものとして、従来中国にもその例を見ない特異なものとして来たが、これ等からすると、右の古い系統を承けた鏡式の例——勿論それは我が国で鑄造された——と見

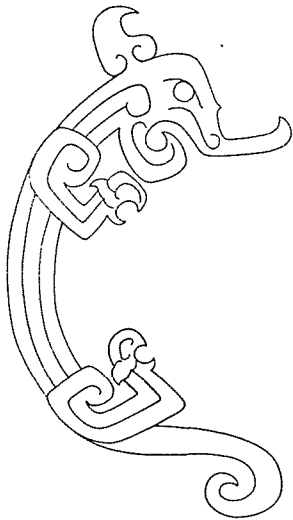
るべきであろう。故サルモニー博士も既に上記ムーア蒐集に係る一鏡の記述のうちに、それとこの狩猟紋鏡との類似を指摘されている。

五

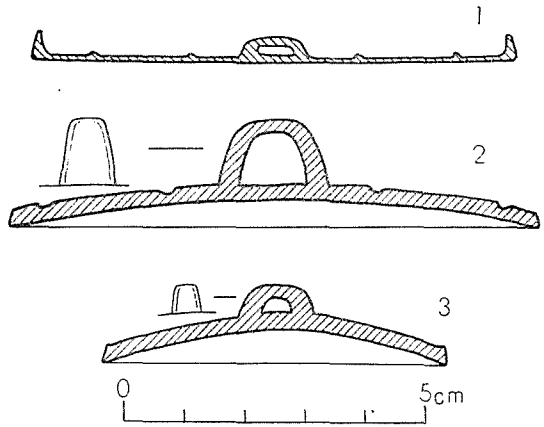
実例の出現に依つて、殷と東周初期に於ける鏡が、それぞれ確められることになつたが、さて両者を併せ見る際、外見の上では後者が寧ろ古拙で、中国の他の古銅器類に較べると可なり見劣りのするものであるのに対し、時代の遡る前者が同じ小形ではあるが、発達し、構図も整い、その上に質もよく、勝れたものであることが、やや異様に感じられる。ところが安陽の遺品が出土した翌年の春、私が北京の黄濬氏の許で見出して、内地に齎し帰り、いま京都大学文学部陳列館に收藏する一鏡は、面の凸凹の点では違つてはいるが、まことに殷の鏡とよく似ていて、而も裝飾紋の上で周の中期と認められるものであることが、注意を惹くのである。

本造品は面径八・八センチの円いもので、鏡背の中央にやや高いコ字形の带状鈕を持つことが先ず殷鏡とよく似た

点として挙げられる。次にこの鈕を繞つて丸い座が割され、それと素縁との間の広い帯は、極めて薄い沈凸紋で飾られている。表わされたその図紋は、現在鏽化した部分がある為に明瞭を欠くところもあるが、鈕を繞つて、内側にむいた所謂虺龍の側面形を二つならべた廻紋を主として（第五図）、それに小虺をからませた所謂蟠螭の原形とも見られるものである。この構図が整つている上に、虺龍の形態が周代中期の古銅器や、古佩玉に見るのと同じ様相を具えたことは図版4に載せた実大写真の示す通りである。その質も、現在では面がかなり鏽化して、青緑鏽に被われ



第五図 虺龍紋鏡の虺龍形



第六図 古鏡断面図

ているが、部分的にはなお鉛白の銅の地肌をとどめた所があつて、本来白銅であることが認められ、面には像をうつすに充分な滑沢がある。この点も初の殷の鏡と同様である。ただ此の遺品では彼の凸面なのと違つて、約三・五ミリの内に反つた凹面であるのが対蹠的である。(第六図の2)併しこのような凹面の鏡が、古く東亜の地域内に行われていたことは、時代は下ることながら、極東に分布する

所謂多鈕細紋鏡例の示す如くであるし、古銅器の蓋にはこのようなものを見受けないことなどから、出土地の所伝を失つて遊離した遺品ではあるが、これも鏡であつて、新出土の陝東出土品等とほぼ同時代の別な一例をなすものと見てしかる可きであらう。そしてこの鏡に於いてさきの殷代の一例との先後の關係がよりよく理解されるのではないかと思われる。

ところで京都大学文学部陳列館にはこの外になお一面の似通つた遺品がある。嚮の大戦の終りに近い一九四四年に浅井暹氏が北京で見出し、貴重な資料として特に寄贈されたものがそれである。これも鉛白の地肌を一部にとどめた、やはり佳良な銅質で作られていて、すべての点で前例に近い。尤も径は五・七センチという一層小さいものであるのに対し、面がより著しく凹み(第六図の3)、その工合は『周礼』、『淮南子』等に散見する火をとる器の「燧」に比定するにまことにふさわしい。背紋はやはりコ字形鈕の座から縁への間に、一種の羽状蟠螭紋を布置して(図版5)、その紋様から考えると鑄造の年時は戦国時代と判定される。

六

以上挙げて来た若干例から推すと、周の中期に中国には明らかに金屬鏡が行われていた。それ等の鏡例はすべて背面にコ字形の鈕を具えていて、これを繞つて禽獸の裝飾紋を施したものであつた。そして図像が古拙で、一見したところは欧亜大陸北部の青銅器時代に、盛に行はれた鏡に近い外観を持つが、他方、良質の白銅を以て作つた所謂凹面鏡も存するのである。そうすると依然としてなお一例ではあるが、殷墓から出た初に挙げた遺品と、是等との相関々係はその鏡式によく似ていることにより、自から認められるであろう。中国に於ける金屬鏡の由来に対して、是等の新しい事実から戦國の世よりも遙に遡つた殷の後半に既に鏡が作られ、その後も一部に行われていたことが知られるのは、まさに鏡に関する既往の知識を更新するものと言ふ可きである。ここで特に注目されるのは先ず最も古い殷代の鏡に就いてであつて、それは当然中国に於ける金屬鏡の起源の問題と結びつくものである。

一九二〇年代の後半に、新しく、多数の戦國時代の遺品

が発見された際、それ等の示す鏡背紋の形式の変遷からみて、中国銅鏡の起源は、欧亜大陸北部の文物に負うところがあるだらうとされた見解は、ここにあげたより古い实例の出現によつて解消されることになつた。ただしこの三十年來、欧亜大陸北部地帯におけるソ連学者の熱心な考古学上の探査に依つて、闡明の度を加えた同地域の古文化——殊に青銅器時代のそれ——の様相が、中国殷代後半の文物の知識の拡充と相俟つて、一層古い時期に、両者の交流があつたことが考えられるようになってゐる現在、ここでとりあげた中国の古い殷鏡を以て、かれの影響を受けた所産とする別の新しい見解の可能性が、西方の学者達に依つて説かれることがあるかも知れない。

これは紀元前三千年代に遡るとされる古代世界に於ける最古の原始的な円い銅鏡が、近東イランのスーサの古い層で発見されていて、それから西方に於ける柄鏡への發展があとづけられることや、他方で、鈕のある單純な円鏡が、北方地帯に早く行われて、時代の上で戦國より遡るものがあることとされ、特にこのうちミスンスクを中心とした地域における青銅器時代を特色づける銅小刀と相似た形の利器

が、殷墟・殷墓に於いても見出されている事実などは、この新たな見解に一つの有力な拠所を与えるように見える。

しかし既に高去尋氏も指摘しているように、それに就いては北方地区での、青銅器時代の編年の実時代観が、なお仮定の域を超えないのに反し、他方、中国では、殷後半、前二千年代の後半に、既に青銅器時代の盛期が劃されているから、彼此の時代の先後の上で疑念がさし挿まれる。そうして寧ろ東周の初期に当る頃に、北方地区の盛期があるように解される点で、さきにあげた見解は可能性を欠くことになる。更に両地域に於ける青銅器時代の様相そのものにあつても、殷墟・殷墓の出土品に示現された文物は、北方地域のそれに較べて、遙かに高度のもので、且つ多くの独自の特色を持つている。例えばこれを普遍的な利器に就いて見ても、戈・鉞等に於いてはつきり認められるのであつて、北方地域における短劍・小刀を主としたものと違つている。更に北方地区では後に僅かに見受ける単純な台附の銅容器に較べて、中国での銅容器である尊彝は、その名の示す如く、他とかけ離れたものが、殷代に於いて云わばその頂点を劃して、裝飾紋にあつて特に著しいものがあ

る。されば高氏の挙げたように殷の世に別に面の凸な形態の器や、相似た鈕状の把手などの器が行われていたのであつて見れば、当時の進んだ合金を以て、映像にふさわしい問題の鏡が作り出されたことも考えられ得るであろう。これを実物に就いて見ても、北方圏地区での鈕のある鏡をはじめ、現在知られた古い金屬鏡のいずれもが原始的であるのに較べて、形は同じく小形ではあるが、背面の裝飾紋に、後の鏡に於けると同じ成型すら認められる点で、その妥当性が考えられる。

殷墓の遺品そのものが、戦国時代以降中国で特に発達した鏡の祖型と見られる形態をもち、而も進んだものであることは、既にそれが出土した当初から認められていた。ただ当時にあつては夥しい殷墓群の発掘調査にもかかわらず一例のみの点が、以後戦国までの間に確実な遺品を見ないことと相俟つて、実用の器とするに問題がのこされたのであつた。然るに同じ殷代に於いて、それにつづく西周の器を欠いてはいるが、ここに確実な陝東の新出土鏡をはじめとする東周初期の、若干ではあるが、同じ系統と認められる鏡の存在が知られたことによつて、この疑念が解消され

ることになつた。

さて、殷の後半に既に作り出された金屬鏡と認められるものを承けたその後の変遷、即ち同じ円鏡が盛んに行われた戦国時代までの発達となると、現在の、陝県出土品をはじめとする東周初期の若干例のみを以てしては、固より具體的なことなど推し得べくもなく、それは当然今後に於ける遺例の出現に俟つべきである。併し遺品の示すところから考えると、古い系統を承けたことが認められるそれ等の間にあつて、陝県出土例其他が寧ろ北方系の円鏡に似かよつた古拙な鑄銅品であるのに対して、京都大学所蔵例が良質の白銅を主材とした凹面のもので、その間に差異があつて、後者は既に指摘したように古文獻に見える火をとる燧に当てるに恰好なものであることが注意されるのである。ただ中国に於ける現下の夥しい古代文物の出現の間にあつて、現在なお戦国以前に遡る鏡例の発見に乏しい事實は、当時映像の具としての金屬鏡が、まだ一般に行われるに至

らなかつたのではないかと推測される。文献の上では当代に映像の具として別に鑑——銅容器即ち「みずかがみ」——の行われたことを伝えて、現にその名を印した周後半の実物も存するのである。

戦国時代に見る夥しい古鏡は殷例と同じ白銅質の鈕鏡を主としているが、その主要な鏡背の裝飾に於いて、單なる素紋の鏡体に、別個な地文を布置するものから、段々とまとまつた鏡の飾りへの發展形を示す事實——筆者が、『漢以前の古鏡の研究』に於いて明らかにした——は、この時代になつての歐亞大陸北部を通じての西方文物の強い影響に依つて、古い中国で金屬鏡の使用が一般化した場合の様相を示すものでもあるであらう。戦国時代に鏡の盛んに行われた安徽省寿縣の地方の古伝を録した『淮南子』に、戦国に入つて鑄銅の鏡の作られ出したことを記しているのがそれと聯関して、こゝで注意されるのである。

Old Mirrors of *Yin* (殷) and *Chou* (周) Dynasties in China

by

Sueji Umehara

It was recognized in the latter half of 1920s that the origin of metal mirrors starts far back of those in the *Han* (漢) dynasty which were to be the oldest heretofore, by abundant appearance of the mirrors in the *Chan-kuo* (戰國) era; but as for the mirrors in *Yin* (殷) or *Chou* (周) dynasties any reliable sample could hardly be found. In recent years, however, the mirrors before the *Chan-kuo* (戰國) era become to deserve of being discussed, as a result of the report on the mirrors of *Tung-chou-kun-kuo* (東周虢國) from *Shan-hsien* (陝東) *Ho-nan-sing* (河南省) the finds from *An-yang-yin-mu* (安陽殷墓).

This article, besides introduction those finds, tries to study the origin and tradition of the Chinese mirror and their connection with later mirrors, supplying some references at hand.

On the Geographical Characters of the Roman Towns in Great Britain

—Especially from the points of views of their
location and town planning—

by

Kenjirō Fujioka

We must often use the historical approach to study the English urban geography, because most of the modern English cities and towns originated in their situations and town plans from the Roman Age as well as their Roads.

The aims of historical geography are to reconstruct the geographical aspects in historical age and to research the geographical connection with the modern landscapes. In this monograph, I discussed, for the first time the geographical meanings of the three Roman frontiers and the administrative division of military and civil zone. I think that these administrative divisions were much more influenced by the physical basis of modern England, in spite of their more or less military purposes. For examples, the military zone was belonging to Highland region in general and characterized by meagre environments and the Hadrian Wall was constructed by choosing the shortest dis-